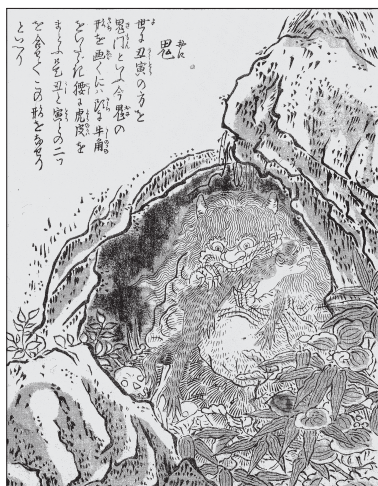


今昔百鬼拾遺
鬼



◎鬼

◎鬼

世に丑寅の方を鬼門といふ
 今鬼の形を画くにハ
 頭に牛角をいたゞき
 腰に虎皮をまとふ
 是丑と寅との二ツを合せて
 この形をなせりといへり

———
 今昔畫圖續百鬼／雨

鳥山石燕／安永八年

1

「逆とても恐こわい——と云っていました」

少女はそう云った。

姿勢も良く毅然きぜんとしてゐるから、訴えかけると云うよりも抗議すると云う体ていなのだけれど、少女は興奮きふしている訳でもなく、また決して怒っている訳でもなかった。兎とに角かくこの娘は生真面目きまじめなのだ。

会ってから一度も目を逸そらさない。

気恥きぢずかしくなつてこちらが視軸しじくを外はずしてしまふ程である。

まだ十四じゅうしだと云う。

中禅寺敦子ちゅうぜんじ あつこはその頃の自分を思い浮かべる。自分も、矢張りやはりこんな顔をしていたのだろうか。前向きだけれど融通ゆうつうの利かない、頑迷がんめいではないけれど納得するまでは引き下さがない——敦子もそう云う娘だった。だからきつと、頻繁ひんぱんにこんな相手に咬かみ付きそうな態度を取っていたのだらうと思う。

でも、そこ以外は全く似ていない。

小柄な敦子と違って、目の前の娘は背も高く、手足も長い。それだけで、もう随分と活動的に見える。身長は敦子の方が低いだろう。齡上しじょうえの方が背丈が大きいと云うのは、それこそ児童こどもの発想なのだろうと思うし、それこそどうでも良いことだとは思うけれども、この外見もたちが齎もたらす潑刺はつらつとした印象に対しては然さしたる理由もなく劣等感を覚えてしまう。

「あの」

少女——呉美由紀は小首くれみゆきを傾かしげた。

ご免なさいと敦子は取り繕つくろう。

聞いていなかった訳ではない。

「一つ確認させてください。その、逆とも怖いと云っていた、と云うのは、どちらの方なんでしょう。被害者の片倉かたくらさんですか。それとも加害者の宇野うのさんですか」

あ、私こそご免なさいと、美由紀は円まるい目を更に円く見開いた。

「夢中になって話してしまつて。私、順序立てて話そうと心掛けていたんですけど、いつの間にか興奮してしまつて。何か、その、支離滅裂ですか?」

そんなことはないですよと敦子は云う。

凡およそ十四五の娘とは思えない話し振りである。

中禅寺さんのように上手には話せませんと美由紀は云った。

一瞬、何のことかと思った。美由紀とは初対面だし、会ってから敦子はまだ殆ど喋っていないからだ。

しかし美由紀が云う中禅寺とは兄のことだと、敦子はすぐに察した。

敦子の兄は、小さな神社の神職を務める傍ら、古書店を営んでいる。

つまり、兄はただの一市井人に過ぎないのだけれど、刑事や探偵、事件記者など、ただの一市井人とは云えない特殊な人人と懇意にしているものだから、犯罪性を帯びた騒動に巻き込まれることも少なくないし、事件解決のために担ぎ出されることも多いのだ。一般的には古本屋兼神主がそうしたことに役立つとは思えないのだが、どうも兄に限っては役に立つようである。

兄は余計なことを何でも識っている。

そして、悪魔的に弁が立つ。

非力で体力もない兄の武器は言葉だ。繰り出される言の葉の渦の力は、強い。時に人心は揺れ場は覆り、事件は解体する。

兄は多分、言葉で出来ている。

だから記憶の中の兄の貌はまま曖昧になるのだが、声だけは常に明瞭である。その声はいつも理路整然とした文脈で、揺るぎなき理を語っている。

去年の春、全寮制の女学院を舞台にした連続猟奇殺人事件が起きた。

美由紀はその事件の関係者なのである。仲の良かった友人を含めて何人もが目の前で殺され、通っていた学院も閉鎖されたと聞いている。

敦子の兄は、その事件の収束に手を貸している。

美由紀はだから、兄の長広舌を実際に現場で耳にしているのだ。

敦子は少し笑った。

「あんなに能く喋る人はいません。兄のように話したりしたら、周囲が引きます」

「女だからですか？ それとも小娘だから？」

美由紀の眼は益々円くなる。

敦子は首を振る。

「女だからとか男だからとか、そう云う区別は無意味だと思う。私はそう云う括り方が嫌いだから——いや、好き嫌いじゃなくて、そんなの関係ないわ」

「関係ないですか」

「いいえ——世間的にはそうやって分けちゃった方が都合の良い人が多いから分けたいんです。序でに云えば年齢も関係ない」

半分以上は自分に言い聞かせているようなものだと思ふ。

性差を超え、年功序列を素ッ飛ばして今の世を生きるのは、正直結構しんどい。

「兄貴は——変なの」

敦子は兄を思い浮かべる。

矢^や張^ばり声しか浮かんでこない。

変だったでしょと問うと、美由紀は苦笑して、ええまあと答えた。

「でも、あんなに沢山難しいことばかり話してて、ちゃんと意味が通じるって凄いなと思つて。私、ちゃんと理解出来たんですよ。でも言つてゐることは結構難解で、知らない言葉なんかもいっぱい雑^まじつてゐるのに、何故解つたのか自分でも解らなくなつて」

「煙に巻かれただけじゃないの」

そう云う人なのだ、兄は。違いますと美由紀は云つた。

「意味は解らなくても理屈は通じたと云うか、いいえ、もう一度説明してみろと言われても、私には上手に出来ないんですけど。私、語彙^{ごい}と云うんですか、それがその、少ないんです。でも、じゃあ一知半解で解つた氣になつてゐるだけかと云うとそんなことはなくて、理解そのものは出来てゐると思うんですよ。それはつまり、論理的と云うか、理詰めと云うか、そういう形ではちゃんと通じていて、単に私が言葉知らずだから説明出来ないだけだと思つたんです」

「そんなことはないと思うけど」

いいえと美由紀は首を振る。

「あの事件の時も、私の話は大人には通じなくて——でも能く考えて、言葉を選んで、きちんと話したら通じたんです。もつと早くにそう出来ていれば、少しは事件解決に貢献出来たんじゃないかって、それが」

悔いているのか。

知る限り、この娘には何の責任もない。寧ろ被害者である。学院内だけでも生徒が三人、職員が二人殺され、怪我人も出ている。皆、この潑刺とした少女の眼前で起きたことなのだ。普通ならどうだろうと思う。否、普通などと云うものはない。自分ならどうだろう。惨劇からまだ一年経っていないのである。こんなに氣丈に振る舞えるだろうか。それ以前に、自分の立ち居振る舞いを反省するなど云う殊勝な態度が取れるだろうか。

それは——そうするだろう。

この辺は似ているのかもしれない。

「人に何かを伝えるためには、そして信じて貰うためには、言葉って大事なんだなと思って。言葉知らずでも。順序立てて、論理的に説明することは大切だって痛感して——」

「それはその通りだと思うけど、兄貴を見習うのは止した方がいいですよ。真似しようとしても出来ないし。言葉って、過信しちゃいけないものだと思う。私も同じように考えることはあるけど、結局言葉の迷路に迷いこんじゃって出られなくなるもの。順序立てて話すことはいいことだけど、身の丈に合った言葉を使えばいいと思う」

やっぱりご兄妹きょうだいですよねえと美由紀は感心したように云う。

「何か似てます。中禅寺さん」

今度の中禅寺は敦子のことだろう。敦子でいいわよと云った。

不思議な空間である。

所謂裏露地で、しかも駄菓子屋の前だ。粗末そまつな木机はぎが出てあり、それを挿はさんで更に粗末な縁台が置かれている。敦子と美由紀はそこに差し向いで座っている。径幅みちばたは偉く狭いから、明らかに通行の邪魔だし、入店の妨害にもなっていると思うのだが、どうもそうでもないらしい。少し先で袋小路になっているようだし、見る限り塀ばかりだから、そもそも通行する者は少ないのだろう。

普段は、ここで児童達こどもが座って駄菓子を食べたりしているのだと思う。

今はラムネの瓶が二つ載っている。暑い時期でもないから——と云うより明らかにまだ寒いことから、敦子はラムネなど飲みたいとは思わなかったのだが、選択の余地は全くなかった。

美由紀の後ろの板塀にはジュース、ソーダと書いた貼り紙が覗いているのだが、それは共に粉末ジュースのことだった。勿論、お茶も珈琲もない。

ここは美由紀の秘密の場所らしい。学友達は甘味屋なんかに行くらしいのだが、美由紀は苦手なのだそうだ。ここで子供相手に遊んでいた方が性に合っているのだと云う。

駄菓子屋は屋号を子供屋こどもやと云う。そのまま——と云うか、考えように依つては巫山戯たふざけ名前のようにも思えるのだが、元は餅屋で、開業以来ずっとこの名なのだそうだ。先の戦争で働き手を失つて餅が作れなくなり、残つた老寡婦らうこが一人で出来る商売として駄菓子屋を開業したと云うことらしい。

待ち合わせ場所を最初に聞いた時、敦子は少しばかり驚いた。駄菓子屋で待ち合わせなどしたことがない。しかし相手はまだ子供なのだからそう云うこともあるかと思ひ直したのだつた。しかし、待つていた美由紀は背も高く、考へていたよりもずっと大人びていて、もう一度驚いた。制服を着た美由紀の佇まいはどう見てもうらぶれた景色と釣り合つてはいなかったのだが、何故か馴染んではいた。

子供屋は上馬かみうまにある敦子の住まいからそう遠くはない。前の大きな通りは能く通る。ただ横道に入つたことなどない。用がない。何ごとにも杓子定規で何につけあそびのない人生を歩んでゐる敦子は、意味もなく回り道などしないのが常である。そんな己じぶんに嫌気が差して、昨年の秋に横道に逸れてみたりしたのだが、その所為せゐで手酷てひどい目に遭つた。

それから横道には入らない。

だから情景コケイジョウは新鮮である。

「それで——もう一度尋きくけど」

恐がつていたのは誰、と敦子は問うた。

「片倉さんです」

「被害者ですわね」

「ええ。殺された片倉ハル子さん。高等部の一年生です」

「貴女は——」

もうすぐ高等部ですと美由紀は云った。

「今の学校は中等部の三年で編入したので、すぐには中中お友達とか出来なくなつて。前の学校のこともそれなりに知られていたの——」

それは理解出来る。

同年代の同性ばかりの集団と云うのは、それなりに難儀なものなのだ。仲良くするにも面倒な手続きが必要だったりするし、時に陰湿な悶着も起きる。違うものではなく、似たものばかりが集まっているような場合、僅かな差異が大きな隔たりと錯覚されてしまうこともあるし、逆に均^なされて同質化してしまつたりもする。どちらにしても普通にはして貰えない。何ごとにも負荷がかかるのだ。

美由紀は人殺しの学校から来た子、と呼ばれたそうである。

美由紀がそれまで在籍していた学校の生徒は殆どが良家の子女で、皆、学校が閉鎖された後もそれなりの学校に移籍し、然るべき待遇を受けているらしい。彼女達は皆、被害者として扱われているのである。しかし美由紀の場合は少少違つていたようだ。

美由紀の実家は、美由紀の言葉を借りるなら、貧乏とまでは云えないが決して裕福ではない——のだと云う。前の学院に入学する際はかなり無理をしたようである。学院の閉鎖が決定した時、美由紀はこれ以上の勉学を諦めたと云う。

今の学校への編入が叶ったのは、閉鎖された学院の理事長代理が便宜を計ってくれたからなのだろう。その人はあくまで個人的な行為とした上で、経済的な援助までしてくれたい。敦子の知る限り、その人物はかなりの大物である筈なのだが、これも美由紀の言葉を借りるなら、その理事長代理と云う人はとびきりの正義漢で極めて善人なのだけだ、底抜けに鈍感で頗る樂觀的な人物——であるらしい。

中辛辣である。

苛められたりしたのと敦子は尋いた。

「さあ。無視とか、陰口とか、そう云うのはそんなに気にならない性質だし、私、叩かれたら叩き返しちゃう口なので。と云うか、殺された友達を悪く云われた時なんかは、頭に來て相手を蹴つ飛ばしちゃうって、逆に叱られました。そんなだから苛められたと云う実感はなくて、暫くの間、孤立してはいましたけど——」

今は結構普通にしてますと美由紀は云った。

「半年くらいは誰とも口を利きませんでした。でもハル子さんだけは別で、最初から迎も親切にしてくれました」

「最初から？ 学年は一級上よね？」

「ええ。編入してすぐに声を掛けられたんです」

「そんな風に、上級生とは普通に交流があるの？」

「あると云えばありますけど——何と云うんですか。その、エスじゃないかとか謂^いわれたりもしたんですけど、そんな訳ないんです。エスって、上級の人が下級の可愛い子を愛するって云うような意味ですよね？」

「うーん」

間違っていないが、美由紀の云う愛するがどの程度の意味なのか諮^{はか}り兼ねて、敦子は口籠^{くろう}ってしまった。

エス——シスターの頭文字のS——である。女学生の世界ではかなり古くから使われている隠語で、単に好意を持つとか、仲が良いとか云うだけに留まらず、時に肉体関係を伴う間柄も指し示す。敦子が学生だった頃も使われていたから、すっかり定着しているのだろう。少女小説の題材に取り上げられ、それらが人気を博したことも大きいと思う。

ただ、現在も同じような意味で使われているのかどうかは判らない。

「そうだとすると、そうじゃなかった、ってことなの？」

私可愛くないですもん、と美由紀はあつけらかんとした口調で云った。

「そう——かな」

「そうですよ。だってどんどん丈が伸びるんですもの。この一年でまた伸びました。竹馬女です」

身長は関係あるのと問うとそうですよと云われた。

「可愛いというのは、やっぱり小さいものに対して適用する言葉です。ハル子さん——片倉さんは、私より背が小さかったんですもの。丁度、敦子さんくらい」

死んでしまいましたけど、と美由紀は云う。

途端に、話題は血^ち腥^{なまぐさ}さを帯びる。

「前の学校で仲良くしていた娘^{むすめ}は、絞殺魔に頸^{くび}を絞められて死にました。仲良くなりかけた娘は転落死して、私が疑いをかけた人は目潰し魔に殺されました。今度は辻斬り——」
そう。

それは、昭和の辻斬り事件と呼ばれている。

私、殆ど死に神ですねと美由紀は自嘲するかのように云った。

統計をとった訳ではないから正確なことは判らないけれど、身の周りで殺人事件が起きる確率と云うのはかなり低いものだろうと思う。天災や事故などで肉親や知人友人を一度に多数失うことはあるだろうし、悲しみは数値化出来ないから数の問題でもないと思うけれども、そうした不幸な奇禍^{きか}に遭う可能性とて多くはないし、況^まてや複数回体験する確率と云うのは高くないだろう。

「死に神と云うならうちの兄貴の方じゃない。貴女は違う」

こんな潑刺とした死に神はいないだろう。

そう云うと美由紀は笑って、ハル子さんにも云われましたと答えた。

「美由紀さんのような元気な死に神なんかいないって。死に神がそんなにはきはきしていたのじゃあ、死ぬ人も死ぬないって云われました」

「そうでしょう。みんなそう思うのじゃない——」

いや。

と、云うことは。

「美由紀さん、片倉さんに前の事件のことを話したの？」

色色訊かれたので話しましたと美由紀は答えた。

「それは丁寧に、詳しく聞いてくださったんです。勿論、云ってはいけないことは云いませんでしたし、話したくないことは話しませんでしたが、お話しすることで気持ちに整理がついたと云うか——やっと、自分の中で事件が終ったと云うか」

それは、幾つかの独立した事象が複雑に交錯した、それは難解な事件だったようだ。一応実行犯は捕まったものの、それですっきり終わってしまうような事件ではなかったのだと聞いている。

「それなのに、そのハル子さんが死んでしまいました」

昭和の辻斬り事件は出来たばかりの駒澤野球場^{こまざのやきゅうじょう}周辺で発生している。

被害者は七人。うち四人は死亡し、二名は重傷、一人は軽傷であった。

報道に拠^よれば最初の事件が起きたのは昨年の九月。

最初の被害者は胸と左二の腕を切られただけで命に別状はなく、その時点では単なる通り魔、強盗の類いと考えられていたようだ。

その二箇月後、二件の傷害事件が起きた。一人は左腕をほぼ切断されるという重傷。もう一人は左脇腹を切られ、同じく重傷であった。目撃証言から犯人は同一人と思われ、凶器も日本刀と断定された。警察は金品を目当てとした強盗ではないと判断、先に起きた一件と併せた連続通り魔事件として報道がなされた。

更に二箇月後。年を跨いだ本年、マリリン・モンロー来日で世間が沸いていた頃。

一月三十日を皮切りに、立て続けに三人が殺害された。一人目と二人目は病院に搬送されたものの出血多量で死亡。三人目は即死に近かったと云う。犯行はほぼ一週間置きに行われ、いずれも所謂袈裟懸^{いわたけ}けに斬られていたそうである。こちらも凶器を含む状況証拠から先行する三件と同一犯の仕業とされた。

昭和の辻斬りと云う、あまりセンスが良いとは思えない命名は、最初の死亡者が出た段階でなされたものである。どこかの新聞社が見出しに書いたもので、他社が倣い、三人目の死亡者が出た段階ではほぼ全社がその呼称を採用していた。

そして七日前。二月二十七日。

美由紀の先輩である片倉ハル子が殺された。

昭和の辻斬り最後の被害者である。

犯人は逮捕されたのだ。

新聞などに扱えば、ハル子を殺害したのは十九歳の旋盤工、宇野憲一^{けんいち}。宇野は犯行現場で立ち竦^{すく}んでいるところを駆け付けた警官に依って現行犯逮捕されている。宇野はハル子殺害の他、過去六件全ての犯行を認め、またハル子と交際していたことも告白している。

動機等に就いては不明であると言う。

猶^{なほ}、ハル子殺害現場にはハル子の母である片倉勢子^{せいこ}もいたと言う。

報道されたのはそれだけである。

何だか釈然^{しやくぜん}としない感じはした。

十六歳の女学生が日本刀で斬り殺されたと言うだけで充分センセーショナルではあったし、殺害したのは未成年の交際相手、しかも連続殺人鬼だったと言う付録まで付いていた訳だから、当然のように世間は沸いた。号外こそ出なかつたけれど、事件翌日の一面は昭和の辻斬り逮捕、交際相手の女学生を斬殺——と言う大見出しになった。

とは云うものの、その後は、あまり報道する意味のない憶測記事が幾つか載っただけである。

ハル子殺しは痴情の縛れであり、宇野は痴話喧嘩の末にそれまで隠していた殺人鬼の本性を剥き出しにしてハル子を斬り殺したのであると云うようなことに――。

なつていた、と思う。

まあ、そうだと云われればそうなのだろう。そう云うこともあるかもしれない。ありそうな話ではある。けれども、敦子は何だか気に入らなかった。

宇野と云う青年が殺人者であったとしても。

更に痴情の縛れの結果の犯行であつたとしても。

痴話喧嘩の末に興奮して犯行に及んだとするならば。

何か咬みあつていない気がした。しかしそれ以上は考えなかった。所詮は下世話な想像にしかないからである。

そんな敦子の許に義姉から連絡があつたのは一昨日のことだつた。

美由紀は元來、兄か、兄の友人の探偵に相談するつもりだつたのである。しかし双方共に不在だつたのだ。兄とその友人達は旅先で例に因つて面倒な事件に巻き込まれているのだそうである。そちらはそちらで混迷しているようなのだが、頼つて来たのが他ならぬあの事件の関係者であり、況て昭和の辻斬り事件に関わることならば余計に捨ててはおけないと――代わりに敦子が駆り出されたと云う訳である。

面倒臭いな、と一瞬敦子は思った。

どこことなく釈然としない想いを持つていたくらいだから、事件自体には多少なりとも興味はあったのだ。敦子は雑誌記者だ。取材は馴れている。聞き取りも現場の視察も仕事のうちである。

面倒だと感じたのは相談したいと云っているのが十四歳の少女と聞いたからなのだ。

敦子は若い娘が苦手なのである。

学生の頃からそうだった。

情より理、夢より実。美しさより機能性。少女雑誌より科学雑誌が好きだった。空想するより推理する方が好きだった。そう云う娘だった。

だから女学生の時分も、女同士のふわふわした会話やふわふわした関係には随分と辟易へきえきしたものである。

嫌いなのではない。認めない訳でもない。苦手なのである。

敦子は、そうしたふわふわしたものを、かなり幼い頃に捨ててしまったのだと思う。捨てていないのだとしたら、何かつまらないものですっかり糊塗こぬしてしまったのだろう。

だから、そう云うものを前面に出して生きている人達と出会うと、どうしても距離を置いてしまうのである。女学生は、きつとふわふわしている。

そう思ったのだ。敦子が面倒臭いと感じたのは、だから女学生そのものに対して感じた訳ではないのだ。それは女学生と対峙たいじした時の己に対して感じた面倒臭さなのである。

でも。

それは杞憂に終わった。

呉美由紀と云う少女は、敦子よりも活発で、敦子よりも——敦子っぽかった。

「彼女は何を恐がっていたのかしら」

ならば、この娘に沈んだ顔は似合わない、敦子は勝手に判断した。

「逆も怖いって、その辻斬り事件を恐れていたと云うことなの？ 慥かに犯行現場はどれも貴女達の学校の近くばかりだし。それに、宿舎は学校の敷地内にあるんでしょう？ なら眼と鼻の先でしょう。当然、それなりに警戒もしていたのでしょーうけど」

みんな恐がってはいましたけどと云った後、美由紀は小首を傾げた。

「でも、どうなんだろう」

「それは？」

「本気かどうか判らないですね。みんな、学校の外の出来ごととは中とは関係ないと、半分くらい思っていて——恐ろしいわ怖いわと口では云うんですけど、何だか実感はなかったみたいに思っています。お休みの日以外で宿舎から出ることは殆どないですし、自分の身に災難が降りかかることがあるなんて考えている人は、あんまりいなかったんじゃないかと思えます。怖いと云っても他人ごとなんです。鼠を啗えた猫を見ても怖い怖い云うんですから、それと同じじゃないかと思う」

「片倉さんは違ったのね」

「ええ。その、辻斬りの話をしていた時にそう呟いていたので、まるで関係がないとは思えませんが、犯人が怖いとか、人殺しが怖いとか——そう云うことではなかったと思うんです」

「では何が恐かったのかしら」

「その、祟りとか呪いとか、その手のものだと思うんですけど」

「祟り？」

「どうも話が見えない。」

美由紀は混乱してはいない。本人も云っていたが、順序立てて論理的に話す努力もしているようだ。それ以前にこの娘は聡明なのだ。だから話が見えないのは、そもそも見え難い話だからなのだろう。自己申告の通り語彙が少ないのか、美由紀自身見聞きしたことの整理がついていないのだろうか。

「もう少し細かく話してくれる？ 執拗しつこいと思うかもしれないけど。片倉さんの辻斬り事件に対する反応は、他の生徒達とは少し違っていた——と云うことでいい？」

はいと美由紀は答える。

「それで、貴女あなたの見る限り、彼女は明らかに何かを恐れていた——これもいい？」

「そうです。ハル子さんは恐がっていました」

「それは、残酷な凶行が身近で起きていることに對する恐怖でも、殺人と云う行為自体に對する恐怖でも、犯人に對する恐怖でも——ないのね？」

「ええ。ハル子さんは、他の娘と違って人殺し自体を恐がったりするタイプではなかったと思います。私が話した去年の事件の話だって、普通に聞いてくれました。いいえ、寧ろあれこれ尋き返されて、必要以上に詳しく話しちゃったくらいです。他の娘は人殺しと聞いただけで耳を塞いで、怖いからやめと云う感じだったけど——」

「自分が被害者になるかもしれない、と云う恐がり方でもないの？」

「それは何とも云えません」

明瞭だ。

この少女は、判ることは判る、判らないことは判らないと、きちんと峻別し、正しく伝えようとしている。

「で、その、崇りと云うのは何処から出て来たのかな」

「はい。ハル子さんは、自分は善くない生れなんだと何度も云っていたんです」

「善くない生れ？」

旧弊的な身分のことか。それとも迷信俗信の類い——憑き物筋のようなものだろうか。

「それって」

「いいえ、差別とか、そう云うことじゃないみたいでした。いや、そうなのかな」

美由紀は顎に人差指を当てる。

「血統がどうか、家柄がどうか云うのは、差別的な事柄ですか？」

「そうとも云えると思う。ただ、そうでない場合もあると思うけど。いずれにしても自分で個人を規定することは、場合に拠っては差別的だと思う。まだまだ根強いけど、私は感心しない。人種や性別も含めての話だけど、個人の努力で変えられない属性を評価の基準にするのは前近代的な考え方だと思う」

はあ、と美由紀は口を小さく開けた。

「私、解り難いこと云った？」

「いいえ。能く解ります。ただ、敦子さん、矢っ張りお兄さんの血筋——あ、これがいけないって話ですよね」

敦子は微笑む。

「兄妹が似てゐるって指摘するのは差別とは違うから」

似て——いるのだろうか。

「そうですね、でも、それに近い話みたいなんです。近くもないのかな。その、先祖代、片倉家の女は殺される定めだったか」

「ああ——」

「しかも、斬り殺されるんだと云う話でした」